

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：24201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02489

研究課題名(和文) 逆境にある子どものレジリエンスを育てる場としての「放課後児童クラブ」の改善策

研究課題名(英文) After school club as a site of Nurturing resilience for vulnerable children

研究代表者

松嶋 秀明 (Matsushima, Hideaki)

滋賀県立大学・人間文化学部・教授

研究者番号：00363961

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、逆境的でリスクのある生活をおくる子どもの「レジリエンス」を育てる場のひとつとして「放課後児童クラブ」に注目し、研究者が実践者と協働で、この場が子どもたちにとってどのような影響をもちうるのか、質的方法による調査をおこなった。その結果、クラブの運営いかんでは、脆弱性をもつ子どもであっても、主体的に活動に参加でき、効力感をもてることが明らかになった。その一方で、子どもたちの暴力などが関係の悪循環をうみ、いじめなど、排斥につながることもあった。子どものレジリエンスを育てるためには、クラブの物的環境や、子どもの関係性を育てたり、葛藤を解決するための実践的知識の蓄積が重要であると示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、個人的特性としてとらえられやすいレジリエンスを、周囲の人々との関係性のみならず、クラブを構成する物的環境との関係性のなかで育っていくものとしてとらえる視点を提供し、それを実際の研究のなかで実現した点において学術的な意義を有する。また、今日、子育て支援の必要性が高まっている現代の日本において、子どもが学校外で過ごす時間の大部分をしめるであろう放課後児童クラブの実践の質向上のため示唆を与えるという意味で社会的意義をもつ。

研究成果の概要(英文)：In this study, qualitative research in collaboration with practitioners focuses on "after-school children's clubs" as one of the places to foster "resilience" in children who lead adversarial and risky lives. The results revealed that, depending on the management of the clubs, even vulnerable children could participate in the activities proactively. On the other hand, problems such as violence and bullying among children created a vicious cycle that sometimes led to the exclusion of vulnerable children. Therefore, to foster children's resilience, it is more important to accumulate practical knowledge about the club's physical environment, nurture children's relationships, and resolve conflicts rather than the vulnerable individuals' characteristics.

研究分野：臨床心理学

キーワード：放課後児童クラブ レジリエンス フィールドワーク 主体性

1. 研究開始当初の背景

本研究では、貧困や被虐待経験など、逆境的でリスクのある生活をおくる子どもの「レジリエンス」を育てる場のひとつとしての「放課後児童クラブ」に注目し、クラブおける子どもの生活を質的な方法によって縦断的にとらえること、そして、研究者と現場指導員とのカンファレンスを媒介とした協働をすすめるが、当該クラブにおける実践の質を高めることを目的としてきた。

「放課後児童クラブ(=学童保育:以下ではクラブと表記)」とは、保護者が労働等により昼間家庭にいない小学校1-3年に就学している児童や、その他健全育成上指導を要する児童(特別支援学校の小学部の児童及び小学校4年生以上の児童)を対象として、授業終了後(放課後)の時間における適切な遊び・生活の場を与え、子どもの健全育成を支援していくことを目的とする制度である。

近年、政府が推進する女性の社会進出の動向ともあいまって、こうした子育て支援制度にむけられる期待は高まっている。「クラブ」の待機児童数も増加しており、これは放課後に子どもの見守りができない家庭が増加していることを意味する。子どもの立場にたてば、提供される「場」の量的拡大だけでなく、その「質」も重要である。池本(2016)は、「クラブ」の拡充事業の多くは、子どもを「預ける場所」を整備するという発想の域を出ておらず、子どもが、放課後、ないし長期休暇中をどのように過ごすのがよいのか、子どもの成長・発達に相応しい環境となっているかといった問題が見過ごされていると指摘している。実際、多くの「クラブ」では、定員の多さからくる環境の悪化や、クラブの指導員の専門性の不足から、指導困難におちいり、子どものだす問題行動に疲弊した職員の早期離職や、体罰などの不適切指導の出現が問題になることもある。

こうした「クラブ」の質をめぐる議論は、貧困や虐待など、逆境的でリスクに満ちた環境にいきる子どもにおいてとりわけ重大な結果をもたらす。例えば、子どもの貧困をめぐるは、低学力の問題とならんで社会情動面での未発達が見過ごされている。すなわち、貧困が、友人関係の希薄さにむすびつくと指摘(阿部, 2011)や、家族からの虐待被害のリスクを増大させること(例えば、東京都福祉保健局, 2005) そうした虐待の結果として非行化のリスクの増大(橋本, 2004; 全国社会福祉協議会 2009)が知られている。西島(2010)は、放課後の過ごし方や1年間の過ごし方に「文化格差」が存在し、それが「親学歴」の影響を受けていることを明らかにしている。このような状況をふまえれば、(低学年では)学校にいる時間が約1100時間であるのに対して、(長期休業中もふくめて)「クラブ」での時間が約1600時間(全国学童保育連絡協議会(編), 2007)というように、子どもに与える影響力が大きいことが予想される「クラブ」が、逆境的でリスクのある子どもたちの育ちに果たす責任は大きいことがわかる。

逆境的でリスクのある少年の生活の改善をめぐる、注目されるのは「レジリエンス」、すなわち「困難あるいは脅威的な状況にもかかわらず、うまく適応する過程、能力、または結果(Masten, Best & Garmezy, 1990)という概念である。これはパーソナリティ特性など、個人的な特性というよりも、子どもと周囲との相互作用プロセスのなかで育てられていくものと考えられる(松嶋, 2016)。この点でも、従来から「学校」と「家庭」とを架橋する場として、子どもの「居場所」的機能をもつことはもちろん、集団での遊びや生活をともにすることによって、他者にあわせたり、適度に自己主張したりといった「社会性」が育つ場とされてきた「クラブ」は重要な役割をになうことができる。「クラブ」で提供されるべき活動内容としても、TVゲームなど個で完結したものではなく、ルールのある遊びや、他者との協働を前提とし、つながりがあり、発展的な遊びにむかうことが追求されてきた。こうした遊びは、OECD(2015)が、子どもの健康、市民参加、ウェルビーイングを増大させるうえで重要な役割を果たすと指摘する「社会情動的(非認知的)スキル」にもつながる。

2. 研究の目的

本研究課題においては逆境的な環境での育ちをしている子どものレジリエンスを育てる場のひとつとして「放課後児童クラブ」に注目し、研究者が実践関与的にかかわりながらフィールドワークおよび、クラブ指導員らへのインタビューを通して、(1)子どもがクラブでどのようにすごしており、そのことが子どものレジリエンスを育てることにつながりえるのかを考察することを目的とした。

3. 研究の方法

民営の学童保育所での参与観察をおこなった。来所人数はおおむね30人程度であった。野外での遊びや、工作などの経験を重視し、指導員は常時4名程度であり、なかでも所長は、これまでに児童養護施設での勤務経験もあり、愛着関係に困難をかかえた子どもとの関わり経験もあった。2018年5月から2021年3月まで期間に月1回のペースで参与観察をおこなった。時間帯としては職員の打ち合わせのはじまる14時から、ほとんどの子どもが帰宅する18時すぎまでの4時間強、滞在した。参与にあたっては、子どものお迎えから、宿題の見守り、おやつ、自由

遊び(外、屋内)にいたるまで、概ね他の指導員と同じように動いたが、決められた役割や責任のない、自由な関わりが主となっていた。観察中は、適宜、指導員と意見交換したり、所長と観察中の出来事について報告、意見交換をおこなうほか、臨床心理士としての専門的な立場からの助言をおこなうこともあった。

4. 研究成果

クラブの指導員らへのインタビューでは、クラブでは正式に診断をうけているわけではないが発達障害がうたがわれている子ども、あるいは両親の養育態度から愛着の問題がうたがわれる子どもといった、いわゆる「気になる子」がいると語られていた。こうした「気になる」子どもを中心としてフィールドワークをおこなっていった。研究成果としては、大きくわけて2つの成果を得た。ひとつは、リスクのある子どもの主体的な遊びをひきだすためには、本人の特性への理解のみならず、(1) 周囲の人々との関係性のなかで「問題」が生成・維持されているという視点、および(2) クラブのもつ社会物質性への注目、すなわち、子どもがくらす放課後児童クラブという場所がもっていて、普段はあまりにも自明なために省みられることの少ない制度や物的環境が、本人のやってみようという感覚=主体性をひきだし、遊ぶことを可能にするという側面への気づきである。

(1) 脆弱な子どもの問題を集団のなかでとらえること

放課後児童クラブのどのようなあり方が、リスクのある子どもの居場所となるのかを考える際、なにがプラスの働きかけになるのかといったように「加点」項目を考えるのは難しい。その一方で、なにがマイナスになるのかを考え、その機会を減らしていくことは相対的にみれば児童にとって良い環境を整備することにつながると思われる。発達障害がある子どもへのクラブ内での対人トラブルをなくすことはそのひとつと考えられる。従来から放課後児童クラブをめぐるのは、発達障害などがある子どもは、トラブルメーカーとみなされやすく、結果的にクラブを退所することも少なくなかった。実際、職員の困難感につながっているという研究も多い(例えば、保坂, 2017; 宮里, 2015)。ここで「問題」は関係性のなかで生み出されるものであり、「障碍」があることがその原因とは限らないという社会構築主義的な立場(例えば、Gergen, 1999)にもとづけば、発達障害であることがなぜ「問題」とされるのかを逆に考えていくことが重要になる。クラブにおいて職員たちはどのようにこの子どもたちの「障碍」をどのようによみとり、どのように意味づけて関わっているのかをクラブのフィールドワーク、インタビューなどから検討した。

コミュニケーションに困難を抱える子どもたちは、衝動的な暴力が生じたり、スケジュールが守れなかったり、規則に反する行動をとってしまうといったような規範からの逸脱が生じることがある。これらは度重なると子ども集団のなかでの排斥につながることもあり、そのことがさらにいじめや、当該児童の孤立感からの逸脱行動を誘発するという悪循環に陥ることもある。

例えば、ある時、2年生の児童Cはクラブの子どもらが近所の川での川遊びをとおしてとってきたメダカを私にみせてくれる。ただし、水槽のなかにはいつているメダカを網ですくいだそうとするため、他の1年生児童らが4-5人集まってきて「(すくったりしては)あかんで」「死ぬで」と注意してきた。Cは次第にイライラしはじめ、もはや我慢の限界とばかりに、突然、1年生につかみかかろうとする。すばやくこれを指導員が止めに入ったところ、今度は周囲のものを手当たり次第に投げつけようとする。

ひとまずは1年生に「ごめんね」と謝ることはできたものの、Cの気持ちはおさまらず、それをおさえるために図書室でZ先生に読み聞かせをしてもらい始める。ところが、読み聞かせがはじまったばかりの時から、隣室の図書室にいた1年生が大声で絵本を音読したため、突然「もう、うるさい」と爆発し、泣きながら、図書室でかざってあった本をぶちまけて投げるといことをはじめた。Cを遠巻きにみている1年生たちはその態度に驚いて逃げていく。

ここでCがおこしたトラブルは、ともすれば、発達障害的な特性として理解されがちである。指導員も発達特性を念頭において衝動的な行動がおこらないように気をつけているものの、トラブルになりそうになると集団からはなしたり、個人的にイライラを解消するためのセルフケアを教えたりといったような個別的な対応になりがちであった。

指導員が「障碍」とであると認識することで、その特性に配慮して、クラブ内でのルールからの逸脱に寛容であることが、行動の安定に役立っている面もあったが、その一方で、児童によっては、クラブ内でのルールや規範からの逸脱が目立ち、それを職員が許すことが子ども集団内での不公平感につながることもあった。また、子ども同士でのルールをめぐる会話のなかでの言い争いが生じたり、そのことで余計に児童の衝動性や攻撃性がひきだされてケンカに発展することもあった。または、子ども集団のなかで遊びに入れてもらえないといった「問題」が生じ、そのことが当該児童の孤立感をうみ、暴力行動を誘発するという悪循環に陥ることもあった。暴力などの問題が生じている状況では、職員は他の児童の安全をまもる観点から、A-Cの行動を制限せざるをえないことから、職員との関係悪化につながることもあった。また、子ども集団内でみられる本人の暴力への対処ができない場合には、この子どもにあるとされる「問題」が「障碍」の特性とからめて、その原因として語られることも増えていった。つまり「障碍」をもつ人が実践のなかで困難を生じるというよりも、実践のなかで困難な状況におちいってしまう場合に、その原因の所在としてみられるのが「障碍」となっていたといえる。

(2) 本人の主体性をささえるクラブの社会物質的な布置

クラブの外遊び中心の保育方針とあいまって、普段の生活の中では体験できないような遊具の製作であったり、汚れや怪我をきにしなくて熱中できる遊びが展開され、そのことが事前に「気になる」とされた子ども像からは想像もつかないほどに、いきいきと集団での活動に参加していく子どもが少なからずいることがわかった。

指導員のリーダーである所長のZさんによれば、このクラブでは子どもの遊びには、ほとんど制約は設けていないという。クラブ開設当時は、Z先生も昔ながらの集団遊びをおこなう機会を意図的に設けたり、学校からかえてきた子どもはまず集合してミーティングをもつといったきまりをつくっていたという。Zさんはそれでも多くの子どもは楽しくすごしていると感じていたが、ある時、集団遊びが終わったのをうけて「Zさん、もう遊んでもいい？」と聞いてきたという。Z先生にしてみれば、いままでだって遊びだと感じていただけに、子どもからのこの言葉にはショックをうけ、結局、子どもにしてみればやらされているだけだったのかと感じたという。それ以来、Zさんは大人からあれこれやらせようとするをやめていったという。

その代わりとして、Z先生がとりくんだのは、いろいろなモノをおいて、子どもが遊びたくなる仕掛けをつくることだった。以下に示すのは、入所当時、「気になる」とされていた、ある子ども(B)が中心となって展開した事例である。

(事例) Bは、当初希望していた「大きなブランコ」の建設が失敗におわったあとにでた土で新しい遊びをはじめた。ブランコを作るために堀りおこしてでた粘土を使い、ままごとをはじめたのだ。Bはしばらくすると粘土を整形して皿を作り始めた。やがてBはYさんに「焼き物をつくりたい」という。Yさんが、粘土でつくった作品をよく乾かしたうえで焼くと答えると、Bは作業スペースいっぱい粘土作品をならべて乾燥させた。この遊びは伝搬し、多くの子どもが作品の制作にかかわった。Bは、その後、どうしたら焼けるのかを考え、火をおこす方法をZさんに尋ねた。Zさんは焼くことは無理だと思いつつも、火起こし装置を教え、Bらはそれで火起こしを試みた。

この事例ではZさんが当初、積極的に与えようとした遊具は失敗に終わるが、そこから出た「粘土質で造形にむいている土」が、Bの興味をかきたてた。Yさん、Zさんは裏庭の土をもってきてはいけない、危ないから穴をひろげてはいけないといった制止や、火を起こすのは危ないといった価値判断から遊びを中止させることをせず、知っている野外活動の知識をおしえて見守る姿勢をみせた。こうしたことがあいまって、Bの主体的な遊びを支えることになった。

ここであげたBのような事例は、このクラブではしばしば見受けられる。子ども個人の能力ではなく、人間関係に加えて、人、モノ、制度(ルール)がかかわって子どもの主体性が育まれることがわかる。

(3) 本研究の課題

本研究期間には、研究者も、本人の特性のみによる理解ではなく、周囲の人間との関係性のなかでとらえようとはしていたものの、トラブルが悪化するのを食い止めることができた事例は少なかった。今回の実践のなかでは、クラブに所属する個々の子どもが遊びをとおしてまとまったりすることは少なかった。今後は、クラブの子どもをつなぎ、人間関係を育てていくような実践をおこなうための知識を蓄積する必要があるだろう。また、このクラブの実践を支えているルールや物的環境など、人間関係をとりにくくさまざまなものの布置のなかでとらえなおすことも不十分であった。ごく基本的なルール(例えば、「4時以降にならないとクラブ室からでてはいけない」といった)であっても、それらひとつひとつを自明視することなく、つねに実践のなかでトラブルの発生・維持につながっていないかみなおす視点が必要だろう。

(4) 引用文献

- 阿部 彩 (2011). 子ども期の貧困が成人後の生活困難(デプリベーション)に与える影響の分析. 季刊社会保障研究, 46(4), 354 - 367.
- Gergen. K. J. (2004). あなたへの社会構成主義(東村知子・訳). ナカニシヤ出版. (Gergen. K. J. (1999). An invitation for social construction. London: Sage.)
- 橋本和明 (2004). 虐待と非行臨床. 創元社.
- 保坂 克洋 (2017). 発達障害児支援としての「予防的対応」, 教育社会学研究, 100, 285-304.
- 池本美香. (2016). 放課後児童クラブの整備の在り方: 子どもの成長に相應しい環境の実現に向けて. JRI レビュー, 5, 21-49.
- Masten A, Best K, Garmezy N. (1990). Resilience and development: Contributions from the study of children who overcome adversity. Development and Psychopathology, 2, 425-444.
- 宮里 新之介 (2015). 放課後児童クラブにおける指導員の発達障害児対応の困難感に関する調査研究. 鹿児島女子短期大学紀要, 50, 121-128.

- 西島 央. (2010). 放課後の過ごし方と 1 年間の過ごし方からみる「文化の格差」の問題
研究所報-ベネッセコーポレーション, 55,110-122.
- OECD (2015), Skills for Social Progress: the Power of Social and Emotional Skills ,
OECD Skills Studies, OECD Publishing, Paris,
<http://dx.doi.org/10.1787/9789264226159-en>.
- 全国学童保育連絡協議会 (編) (2007) よくわかる放 課後子どもプラン ぎょうせい
- 全国社会福祉協議会 (2009). 子どもの育みの本質と実践：社会的養護を必要とする 児童の発
達．養育過程におけるケアと自立支援の拡充のための調査研究事業．全 国社会福祉協議会.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 松嶋秀明	4. 巻 38
2. 論文標題 学校臨床でであう秘密と嘘：いじめ, 虐待事例を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 家族療法研究	6. 最初と最後の頁 249-254
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中俊明・松嶋秀明	4. 巻 36
2. 論文標題 統合失調症の子どもをもつ父親がケア役割をになうまでの過程：家族心理教育に参加する父親へのインタビュー調査から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 家族療法研究	6. 最初と最後の頁 177, 184
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松嶋秀明	4. 巻 32
2. 論文標題 レジリエンスを育む診療	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 精神科	6. 最初と最後の頁 559-565
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松嶋秀明	4. 巻 18(5)
2. 論文標題 加害 - 被害 - 傍観のトライアングル いじめを見抜いて解決 / 解消する	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 551-554
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 松嶋秀明
2. 発表標題 子どもの「障害」はいかに「問題」となるのかー放課後児童クラブにおける子どもたちの生活のフィールドワークから
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 「発達心理学研究」編集委員会・松嶋 秀明・仲嶺 真・川床 靖子・岡南 愛梨・北本 遼太・広瀬 拓海・川野 健治
2. 発表標題 発達心理学における社会物質性アプローチの提案ー混迷する時代において私たちはいかに新たな活動を創出できるのか？
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宇多川元一・国重浩一・松嶋秀明・坂本真佐哉
2. 発表標題 ナラティブプラクティショナーが語る
3. 学会等名 一般社団法人日本家族療法学会第38回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山田 裕介・福島 恵・寺田 奈美恵・近澤朋加・瀧 一世・松嶋秀明
2. 発表標題 経験の浅い心理士がアセスメントのフィードバックを行う際に直面する困難さークライアントの利益に繋げるためー
3. 学会等名 心理臨床学会 第40回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hideaki Matsushima
2. 発表標題 REHABILITATION OF "DELINQUENT" STUDENTS AS JOINT PERFORMANCE. - A FIELD OBSERVATION OF JAPANESE JUNIOR HIGH SCHOOL
3. 学会等名 VI ISCAR Congress (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松嶋秀明
2. 発表標題 子どものレジリエンスを育てる場としての放課後児童クラブの可能性
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 保坂裕子・Reggie Pawle・松嶋秀明・青山征彦
2. 発表標題 対人・社会関係における「ずれ」に何をみることができるのか 葛藤・危機・違和感をキーワードとして
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 東海林麗華・半澤礼之・岡田有司・小田雄仁・松嶋秀明・保坂亨
2. 発表標題 ローカリティから考える教師の発達—地域間移動と学校間異動に焦点を当てて
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大久保智生・時岡晴美・平田俊治・田島充士・松嶋秀明・飯田順子・川俣智路
2. 発表標題 学校と地域の協働は何をもたらすのか？ - 教育心理学からみた地域と協働する学校の取り組みと成果 -
3. 学会等名 日本教育心理学会第60回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 北本遼太・広瀬拓海・大塚 翔・茂呂雄二・大山光子・浅沼秀司・悠々ホルン・冠地 情・香川秀太・松嶋秀明
2. 発表標題 発達支援に関わる実践家と研究者の対話を通じた発達の環境の共創
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 藤江康彦・秋田清代美	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京図書	5. 総ページ数 322
3. 書名 これからの教育研究法 - 教師研究編 -	

1. 著者名 M. Watzlawik & A. Burkholder (eds)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 340
3. 書名 Educating Adolescents Around the Globe : Becoming Who You are in a World Full of Expectations.	

1. 著者名 時岡 晴美、大久保 智生、岡田 涼、平田 俊治	4. 発行年 2021年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 216
3. 書名 地域と協働する学校	

1. 著者名 松嶋 秀明	4. 発行年 2019年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 228
3. 書名 少年の「問題」 / 「問題」の少年 逸脱する少年が幸せになるということ	

1. 著者名 岩壁茂	4. 発行年 2018年
2. 出版社 金剛出版	5. 総ページ数 262
3. 書名 カウンセリングテクニック入門	

1. 著者名 大久保 智生、牧 郁子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 162
3. 書名 教師として考えつづけるための教育心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------